

## 個別の実体としての人と two-level の人の同一性基準は如何にして両立不可能なのか

後藤真理子

### はじめに

本論文の目的は、人（person）の同一性に関して、E.J.ロウに向けられたS.シューメイカーによる反論への更なる返答を提出することにある。

通時的な人の同一性の議論については、「単純説」と「複合説」という二つの立場がある。一言で言うならば、単純説とはインフォーマティブな人の同一性基準がないとする立場であり、対して複合説はインフォーマティブな人の同一性基準があると主張する立場である。ここで、インフォーマティブとは世界のあり方についての情報を与えるという意味で用いられる。例えば、インフォーマティブな人の同一性基準がないと言う場合、人の同一性基準についてそれ以上の何らかの情報を与えるような仕方で記述できないということになる。

さて、D.パーフィットによって単純説と複合説という区別が提唱されて以来、この2つの立場は対立してきた。本論文で取り上げるロウは単純説の支持者であり、彼は少なくとも1989年から一貫してインフォーマティブな人の同一性基準は存在しないと主張している。対してシューメイカーは複合説の支持者であり、彼らは論文集 *PERSONAL IDENTITY* (Gasser, G, Stefan, M(eds.), 2012) 内で議論を行っている。その中で、ロウはシューメイカーへの批判を行っており、それを受けたシューメイカーはロウへの再反論として「two-level の人の同一性基準と個別の実体としての人が両立しないと考える理由がない」という論点を提出している。この主張への更なる反論をロウは行っておらず、またロウが該当論文内で行っている two-level の人の同一性基準への批判も我々の常識や日常的な言語使用に訴えるにとどまり、*PERSONAL IDENTITY* の一連の議論だけを見ると、ロウの議論はいささか弱いものであるように思われる。

本稿では、ロウの2010年の論文である”Substance Dualism: A Non-Cartesian Approach”を取り上げ、2012年の論文”The probable simplicity of personal identity”内の two-level の人の同一性基準への批判を補完した上で、シューメイカーの再反論が成立しない可能性を示したい。論文の構成は以下の通りである。まず第1節で、パーフィットの『理由と人格』を参照しつつ、単純説と複合説がどのように異なるのかという点について概括する。次に第2節で、ロウによる同一性基準一般の説明を確認した後、ロウがいか

にして単純説を擁護しているのかを具体的に見る。第3節では、第2節で示されたロウの議論についてのシューメイカーの反論とロウの応答を確認し、その上でシューメイカーの再反論も確認する。そして、第4節でロウが個別の実体としての人をどのように擁護しているのかを見た後、シューメイカーの再反論が成立していない可能性について述べる。

## 1. 単純説と複合説

人の同一性に関しては、大きく分けて単純説と複合説という二つの立場がある。この区別に関しては、『理由と人格』第3部において、パーフィットが「非還元主義」と「還元主義」という語を用いて説明している。本節では、パーフィットの『理由と人格』を援用しつつ、単純説と複合説について概略的に説明する。

パーフィットは、人の同一性についての還元主義的な主張として、物理的基準と心理的基準の二つを挙げている<sup>1</sup>。パーフィットは、以下の二つの主張により、物理的基準と心理的基準が還元主義的であると説明する<sup>2</sup>。

(1)時間を通じた人の同一性は、より個別的な事実が妥当するという事実にだけ存している。

(2)これらの事実は、人の同一性を前提したり、あるいは人の経験がこの人によって持たれると明示的に主張したり、あるいはこの人が存在すると明示的に主張したりすることなしに記述できる。つまり、これらの事実は非人格的な (*impersonal*) 仕方で記述できる。

まず、物理的基準を採用する場合、人の同一性は我々の身体や脳の物理的な継続性に訴えることで説明される。この点で、物理的基準は人の同一性を他の「より個別的な事実」(すなわち身体や脳)に訴えることで説明しているのであり、またそれにより人の同一性に関する説明を行う際に人を前提とする必要はない。次に、心理的基準は人の同一性について説明を行う際、心理的な継続性という観点を導入する。心理的な継続性とは、経験記憶の継続のことである。例えば或る人  $x$  が或る人  $y$  と同定されるのは、 $x$  が  $y$  の持つ10年前の経験記憶を思い出せる時かつその時に限ると考えるならば、その時  $x$  と

y の間には直接的な記憶の繋がりがあることになるだろう。この直接的な記憶の繋がりに訴えるのが心理的基準である。このとき、記憶の繋がりとという「より個別的な事実」によって人の同一性を説明するため、心理的基準は人を前提せずに人の同一性について説明していると言える。このように、還元主義的な見解は、通時的な身体あるいは心的状態の間の関係へと人を還元する。この人の同一性についての還元主義的見方こそが複合説と呼ばれる立場である。複合説は、人の同一性について考える際に、身体の継続性や人の記憶の繋がりのような他の更なる事実により人の同一性が存している点で複合的だと考えられる。

では、人の同一性についての非還元主義的な見解とはどのようなものなのか。非還元主義的な見解によれば、通時的な人の同一性は、物理的継続性や心理的継続性に存しているのではなく、別個の更なる事実であるとされる。非還元主義的な見解は、他のより単純な関係へと人を還元することなく、人という概念そのものを持ち込むことで人の同一性を説明する。単純説の支持者によれば、人の同一性は非常に根本的でベーシックなものであり、より基礎的な関係によって説明されることができないものである。何かの説明を行う際には、何らかの概念をプリミティブあるいは何ものによっても基礎付けられないものとして導入しなくてはならない。単純説を採る場合、人の同一性はそのようなプリミティブな概念として導入される。

以上のことを前提としたうえで、L.R.ベーカーは単純説と複合説を以下のように表現している<sup>3</sup>。まず、或る時点における人が他の時点における人と同一であるためのインフォーマティブな必要十分条件を与えないのが単純説である。対して、或る時点における人が他の時点における人と同一であるためのインフォーマティブな必要十分条件を与えるのが複合説である。以上のことから、単純説と複合説の一番の違いは、人の同一性についてインフォーマティブな説明を与えられるか否かという点にあると分かるだろう。単純説を採る場合、人の同一性はそれ以上分析不可能な事実であり、人の同一性についてそれ以上に情報のある形で説明することはできない。対して複合説を採る時、物理的継続性や心理的継続性に訴えることで、人の同一性について更なる情報がある形で説明を行うことができる。

さて、単純説の論証には直観に訴える論証、経験論的論証、存在論的論証の三種類がある<sup>4</sup>。本稿で取り上げるロウは最後の存在論的論証の立場から単純説を擁護しようとする。存在論的論証は、人が部分を持たない単純な個別の実体であると示すことで、単純説を擁護する論証である。次節では、ロウの議論を具体的に参照することで、ロウがどのように単純説を擁護するの

かを見ていきたい。

## 2. 単純説をいかに擁護するか

前説では単純説と複合説についての概略を述べた。本節では、まずロウの同一性基準一般についての主張を確認し、ロウが単純説をどのように擁護したのかを簡潔に見ていきたい。

そもそもロウは同一性基準をどのようなものであると考えるのか。ロウによれば、同一性基準とは与えられた種  $K$  に属する対象の同一性について、実質的な仕方 (*substantial way*) で論理的な必要十分条件を述べる原理であるとしている。ここでの「実質的な仕方」という語は、トリヴィアルな原理やインフォーマティブではない原理、循環的な原理を除外する仕方という意味合いで用いられている。

このような同一性基準は、ロウ(1989,2012)の述べるところの *one-level* の同一性基準か *two-level* の同一性基準かどちらか一方の形式をとる。この二つの形式は以下のように表現される。

*one-level* の同一性基準： $(\forall x)(\forall y) ((Kx \& Ky) \rightarrow (x=y \leftrightarrow R_{kxy}))$

*two-level* の同一性基準： $(\forall x)(\forall y) (f_k(x)=f_k(y) \leftrightarrow R_{kxy})$

$R_k$  は種  $K$  に属する対象の基準的關係 (*critierical relation*) を意味する。この基準的關係は、反射的かつ対称的かつ推移的な関係であるという意味で同値関係だとロウは述べる。なぜなら、同一性それ自身が同値関係であり、 $R_k$  は種  $K$  に属する対象が同定される場合にのみ  $K$  の間で持たれる必要があるからである。また、*two-level* の同一性基準で用いられている  $f_k$  は  $K$  関数と呼ばれるものを表している。 $K$  関数については、フレーゲの方向についての同一性基準を例に挙げると理解しやすくなるだろう。フレーゲの方向の同一性基準は、線  $x$  と線  $y$  が並行である時かつその時に限り、線  $x$  は線  $y$  と同定されるという形をとる。この時、 $K$  関数は「 $\sim$ の方向 (*direction of*)」関数であり、また方向の基準的關係は線の間平行ということになる。*one-level* の同一性基準は、同一性に関して種  $K$  に属するものの中で持たれる関係から種  $K$  に属するものの同一性条件を述べているが、対して *two-level* の同一性基準は他の種のもので持たれている同値関係から種  $K$  に属するものの同一性条件を述べる (フレーゲの挙げた例を用いるならば、線の間

で持たれている同値関係から方向の同一性基準を述べているということになるだろう) という差異がある。

この上で、ロウは人の同一性基準に関しては、**one-level**の同一性基準の形も**two-level**の同一性基準の形も取ることができないという理由で複合説を斥けようとする。ロウはまず、**one-level**の同一性基準の形式をとる立場として、ロック主義的な基準をあげている。ロウは、ジョン・ロックが『人間知性論』第2巻27章9節において(無論ロック研究者の間で解釈上の問題が生じていることを述べた上で)、歴史上の記録のような事実の記憶ではなく、個人的な経験的記憶をベースとした人の同一性基準を表現していると述べる。ロックの述べた基準を**one-level**の同一性基準の形で定式化すると以下のようになる<sup>5</sup>。

$$(\forall x)(\forall y)((x \text{ は人である} \& y \text{ は人である}) \rightarrow (x=y \leftrightarrow (\forall t_1)(\forall t_2)(\forall e)((x \text{ は } t_1 \text{ において } e \text{ を持つ} \rightarrow y \text{ は } t_2 \text{ において } e \text{ を覚えている}) \& (y \text{ は } t_1 \text{ において } e \text{ を持つ} \rightarrow x \text{ は } t_2 \text{ において } e \text{ を覚えている}))))))$$

ここでの $t_1$ と $t_2$ は $x$ と $y$ が存在している任意のふたつの時点( $t_1$ は $t_2$ よりも前の時点である)であり、 $e$ は個別的な意識経験の変項である。この基準は人が常に今までに持った意識経験を覚えていなくてはならないことを含意している<sup>6</sup>。ここでは、 $t_1$ において人 $P$ によって持たれた経験 $e$ が、人 $P$ が $t_2$ で覚えているまさに同じ経験であるということが重要となる。このことから分かるのは、ロック主義的な基準が経験の同一性基準を前提としていることである。ここでの経験という語の解釈のひとつとしては心的状態が考えられるが、ロウは心的状態の同一性基準が両者とも循環していると述べる。心的状態についての同一性基準について、ロウは以下のような定式化を行う<sup>7</sup>。

$$(\forall x)(\forall y)(x \text{ は個人的な経験である} \& y \text{ は個人的な経験である}) \rightarrow (x=y \leftrightarrow x \text{ と } y \text{ は質的に区別できない} \& (\exists P_1)(\exists P_2)(\exists t_1)(\exists t_2)(P_1 \text{ は } t_1 \text{ において } x \text{ を持つ} \& P_2 \text{ は } t_2 \text{ において } y \text{ を持つ} \& P_1=P_2 \& t_1=t_2))))))$$

この定式化の基準的關係が同値關係である点、またそれが人の同じさ(sameness)を前提としている点は明らかである。この人の経験についての同一性基準は結局人の同一性を前提とすることから、ロック的な基準は結局循環に陥る。ゆえに、ロック主義的な人の同一性基準は斥けられる。

次にロウは、**two-level**の人の同一性基準について考察する。**two-level**の

同一性基準の1つの見解として、人の身体（あるいは人の脳のような身体の特別な一部）が機能的役割を果たす対象だと考えるものがある。人であるということが脳の機能的役割であると考えるとき、人の同一性基準は以下のような two-level の同一性基準として定式化される（なお、量化の変項は脳であり、 $R_P$ は脳の間で持たれる同値関係を表す）<sup>8</sup>。

$(\forall x)(\forall y)(x \text{ が有する人 (person) } = y \text{ が有する人} \leftrightarrow x \text{ と } y \text{ が } R_P \text{ 関係に立つ})$

ロウはこの定式化自体には循環性がないと述べているが、上記の定式化について以下のような疑問を挙げる。このアプローチにおいて、もし「人」という語を或る種の役割を示すものではなく個別的な実体として捉えるならば、それは明らかに不適當である。なぜならば、我々は「私」を思考や感覚から区別されている或るものであると感じており、そのような「私」の存在が単に私の脳のような或る他のものが持つ性質や特徴であるとは感じておらず、また我々の常識と通常の言語は個別の実体を示しているからである。以上のことから、ロウは人の同一性基準について、one-level の同一性基準の形でも two-level の同一性基準の形でも定式化できないと結論付けるのである。

### 3. シューメイカーとロウによる議論

前節で、人の同一性基準については定式化できないというロウの主張を確認した。人がもし我々の存在論的体系において基礎的であるならば、人の同一性基準の定式化の際に他の種の存在者に訴えることができると考えるべきではない。人の同一性は原始的であり他の何ものにも基礎付けられない。人の同一性は「単純」なのであり、我々は人の同一性についてインフォーマティブなことを言えないのである。

さて、シューメイカー(2012a)はロウとの一連の議論の中で、ロウへの反論を行っている。シューメイカーは、まず、ロウの述べる循環は人に限らないあらゆる種の存続するものについての同一性に関する説明でも生じると主張する。ロウは以下のように述べる<sup>9</sup>。「どのような十分な同一性基準も要求されないという意味で、(ロック主義的な人の同一性基準は)インフォーマティブだと考えられることができない。というのも、意識状態はそれら自身…(中略)…それらの状態を持つ人（あるいは意識の主体）の同一性を前提する観

点を除いては個別化あるいは同定されることができないからだ。」この点について、シューメイカーは人の連続する意識状態が必然的にその人の持つ状態であることは認めた上で、どのような状態も必然的にそれが主体に属しており、主体の同一性からその同一性を得ていると述べる。したがって、もしこの種の関係が人の同一性についての説明を循環させるならば、あらゆる種の存続するものについての同一性の説明も循環することになる。もしこの主張が正しいならば、人の同一性に関してのみ単純説を採ろうとするロウの意図と反して、人の同一性に限らないあらゆる種の複合説への反論となってしまう。第二に、シューメイカーはロウが人の同一性の議論の中で、本当に問題となっていることを誤解しているという点を挙げる<sup>10</sup>。シューメイカーは、ここで問題とされるべきなのは共時的であれ通時的であれある状態が同一の人に属するということが何であるのかという点であり、ロウは問題を取り違えていると述べる。

さて、ロウはシューメイカーの反論にどのように答えているのか。まず、第一の点に関しては、ロウはあらゆる存続するものについての同一性基準が循環するという点を否定している。ロウは連続する状態間の関係を用いたあらゆる種の存続するものの同一性についての説明は循環することを認めつつも、連続している意識状態から形作られていない非循環的で「構成的な」同一性基準はありうると述べる。ここで、ロウはロックの主張である「 $x$  と  $y$  が同じ「原子」によって構成されている時かつその時に限り、もし  $x$  と  $y$  が事柄の集まりあるいは一群であるならば、 $x$  は  $y$  と同定される」という基準を持ち出す<sup>11</sup>。この基準において原子は単純であると考えられ、それゆえにロウは非循環的で構成的な同一性基準はあることができると述べる。

シューメイカーの第二の反論について、ロウはシューメイカーが **two-level** の同一性基準の形をとる同一性基準（量化の変項は人の状態 (**person-state**) である）を探していると暗に示唆していると述べる。シューメイカーは反論の中で、人の状態が必然的に人に属している場合、問題となるのはある状態が属している同一の人とは何であるのかということだと述べている。しかし、ある状態  $x$  を持つ人がある状態  $y$  を持つ人と同定されるちょうどその場合、ある状態  $x$  とある状態  $y$  は同じ人に属する状態であるということをシューメイカーは想定しているように見える。この時、シューメイカーは明らかに **two-level** の同一性基準を支持している。だが、第 2 節で見たように、ロウは人を個別の実体であると見なしている。**two-level** の同一性基準は人を個別の実体であるとき不適當であるため、シューメイカーがここで **two-level** の同一性基準を想定しているのならば、シューメイカーの反論はロウ

にとって反論とならないことになるのである。

以上のようにロウはシューメイカーへの反論に返答している。このロウの返答への再反論として、シューメイカー(2012b)は two-level の人の同一性基準の支持と人が実体であると主張することが両立しないと考えるよい理由がないと述べている。確かに、ロウの two-level の人の同一性基準への反論は、我々の常識や言語使用、直観に訴えるにとどまり、またそもそもなぜ人を個別の実体であると考えべきなのかについて述べていないため、ここでのロウの主張を見るだけではいささか説得力に欠けるように思われる。ゆえに、次節では、なぜロウが人を個別の実体として捉えるべきだと考えているのかを確認し、その上で個別の実体としての人と two-level の同一性基準が両立しないことを示し、シューメイカーの再反論に返答したい。

#### 4. シューメイカーの再反論への更なる応答

さて、第 3 節で述べた通り、ロウは人を個別の実体であると考えており、それゆえ two-level の人の同一性基準を斥けた。本節では、ロウの 2010 年の論文である”Substance Dualism: A Non-Cartesian Approach”を参照し、ロウがどのように個別の実体としての人を擁護したのか概括したい。

ロウは論文内で人を身体へと還元して考える複合説を論敵とし、以下のような前提を置き議論を進める<sup>12</sup>。

- (8) 私は自分の身体とも、またその部分とも同定されない<sup>13</sup>。
- (9) もし私が部分によって構成されているなら、全ての部分は私の身体の部分でなければならない。
- (10) 私の身体の部分によって全体が構成されているものは、それ自体私の身体の部分でなければならないか、身体全体と同定されるかのどちらか一方でなくてはならない。
- (11) それゆえ、私は単純な存在者であり、いかなる部分からも構成されていない。

ロウはこれら一連の前提について、前提(8)が最も重要であると述べている。この前提について考えるために、ロウは以下の前提を置く<sup>14</sup>。

(12) 私の同一性条件は、私の身体あるいはその部分の同一性条件とは異なる。

このことを示すために、ロウは以下のような置き換え論証を行う。人の身体の全ての部分が人工物と交換されると考えるのは原理的に可能である。この場合、人の生身の身体もその一部も残存しておらず、また存在もしていないということになるだろう。しかしながら、身体が全て人工的なものに置き換えられた場合でも、人は存続可能である。このように考える時、これは人の存続条件が身体やその一部とは異なることを示しており、それゆえ人は身体と同一ではなく、またそのいずれの部分とも同定されないという結論に至る。このことかた、前提(8)は正しいということが明らかとなる。

次に、ロウは前提(9)については実体二元論者も物理主義者も受け入れることができるものとしている<sup>15</sup>。しかし、前提(10)に関しては、ロウは一部の実体二元論者は拒否すると述べる。この種の実体二元論者は、私と私の身体の関係、青銅像と青銅の塊の関係に類似したものだと見なす。この見解によると、私は私の身体で構成されているものの、私と私の身体は同定されないということになる。青銅像が「全体が青銅の塊の部分から構成されている」という主張を、「我々は青銅像を全て青銅の塊の一部へと分解できる」という主張であると理解する時、この主張は正しい。だが上記の主張を「像の全ての部分が青銅の塊の部分である」と解釈する時、真だと言えなくなる。というのも、問題となっている青銅像が人の像であるとき、その像の頭部は像の一部ではあるものの、青銅の塊の部分ではないということになるからである。この時、青銅像は単純に青銅の塊で構成されているだけでなく、なにか「付加的な」部分を有することになる。

しかし、ロウはこの二元論者の主張に疑問を呈している。もし仮に青銅像が青銅の塊の一部ではない部分を持っているのなら、青銅像は青銅の塊の部分で構成されているが、それとは同定されない頭部のような部分を有することになる。同様に、もし私が自分の身体の一部ではない部分を持ちうるのなら、私の身体の部分によって構成されているがそれとは同定されない部分がある必要がある。この時、私は全体として私の身体によって構成されているのだが、私にそのような部分はない。自己あるいは経験の主体としての私は、私の部分としてのより小さい自己あるいは主体を持っていないのである。ゆえに、ロウは前提(10)を受け入れた上で、前提(11)、つまり「私は単純

な存在者であり、いかなる部分からも構成されていない」へと至る。人は己の身体とは異なる存続条件を持ち、また人は己の身体の部分から構成されていない。それゆえに、単純な個別の実体であると考えざるを得ないのである。

第 2 節でも触れた通り、ロウは個別の実体としての人と two-level の人の同一性基準が両立しないと主張している。この点について、ロウは 2012 年の論文中では我々の常識や言語実践に鑑みる時に強く示唆されると述べるに留めているが、本節で確認した内容を加味する時、ロウの考えはより具体的な主張として理解されうるだろう。ロウは、人はその身体あるいは身体の一部と同定されえないという前提の証明から出発し、脳-同一性基準のような複合説の立場を最終的には否定している。つまり、two-level の同一性基準の形式をとる脳-同一性基準は、我々の言語実践や常識への訴えだけではなく、そもそも人が身体と同定されえないという観点からも否定されるのである。

このようにロウの主張を理解する時、シューメイカーによるロウへの再反論は成立しうるのか。前節で確認した通り、シューメイカーは、個別の実体としての人と two-level の同一性基準が両立しないということは説得力に欠けるという再反論を行っている。しかしながら、ロウの個別の実体の説明を参照する時、シューメイカーの再反論は成立しないことが明らかになるように思われる。

まず、第 2 節で挙げた two-level の同一性基準は、以下の形をとるのであった。

$$(\forall x)(\forall y) (f_k(x)=f_k(y)\leftrightarrow R_kxy)$$

ここで、人を身体へと還元して説明する複合説の立場を採り、人であることが脳の関数的役割であると考える時、two-level での人の同一性基準は以下の形となる（ここでの量化の変項は脳であり、 $R_P$  は脳の間で持たれる同値関係を表している）。

$$(\forall x)(\forall y)(x \text{ が有する人 (person) } = y \text{ が有する人} \leftrightarrow x \text{ と } y \text{ が } R_P \text{ 関係に立つ})$$

この定式化は「全ての  $x$  と全ての  $y$  について、 $x$  と  $y$  が  $R_P$  関係に立つ時かつその時に限り、 $x$  が有する人が  $y$  が有する人と同定される」と日本語では表現される。つまり、 $x$  と  $y$  の脳が同じである時、 $x$  が有する人は  $y$  が有する人と同定される。この脳の同一性の関係から人の同一性を定義する基準は、

人の同一性が脳の同一性に追従していることを示しているため、このアプローチは人の同一性を人の脳によって説明していることになる。だが、本節で見たように、ロウは「私は自分の身体とも、またその部分とも同定されない」という前提が正しいものであり、それゆえに人が単純な個別の実体であると論じている。この時、この脳-同一性基準は単純に間違いだということになるだろう。また、シューメイカーの挙げた量化の変項を人の状態とする two-level の同一性基準を考えたとしても、同様の結論を導くことができるだろう。two-level の同一性基準は、K 関数と基準的關係を措定する時点で、人をより基礎的な存在者へと還元することを定めている。しかし、人は自分の身体ともその部分とも同定されない単純な個別の実体であると考えた場合、人をより基礎的な存在者へと還元することは完全に不可能である。したがって、どのような two-level の同一性基準を考えたとしても、個別の実体である人と two-level の人の同一性基準は両立不可能であり、この時 two-level の人の同一性基準と個別の実体としての人が両立しうるのではないかというシューメイカーの懐疑は否定されるのである。

## おわりに

本稿では、ロウの個別の実体としての人の議論を参照し、*PERSONAL IDENTITY* 内で行われたシューメイカーの再反論が否定されることを見た。また、個別の実体としての人についての議論を援用しロウの議論を整理することで、単純説を支持するロウの立場がより説得的になる可能性を示せたように思う。

だが問題は残っているように思われる。ロウの挙げる実体概念の条件は、加地(2008)によれば以下のようなものである。すなわち、実体の条件とは、個体が属する種の本質がその個体の同一性基準を与えとした上で、その本質が他の個体に依存しないことである。この条件に則るならば、人という種は存在しなくてはならない。また、ロウの提唱した存在論的体系である 4 カテゴリー存在論によると、種は対象と必ず例化關係を持たなくてはならない。このことに鑑みるならば、人という種が存在する時、人という対象もまた存在しなくてはならない。この場合、生物種であるヒト種を例化するヒトという対象と、*person* としての人という対象はどのような關係にあるのか。そもそも対象というカテゴリーに属する人は、具体的にはどのような存在者としてこの世界にあるのか。また、個別の実体という基礎的な存在者を、他の対

象と同列に扱うべきなのか。以上のような疑問は、ロウの提出した4カテゴリー存在論という体系の中で、いかに整合的に解釈されるべきなのか。これらの問いに回答するための方法として、ロウの実体概念についての主張をより詳細に分析し統一的に理解することが挙げられる。これによって、ロウの主張する単純説を更に強固な説として擁護することが可能となるように思われる。

## 注

1. パーフィットによれば、最も単純な物理的基準は「通時的な私の同一性の基準」を「通時的な私の脳と身体の物理的継続性」とするものである。この立場を採る場合、人の同一性とは特定のある脳と身体とが物理的に連続しているということ、すなわち時点  $t_1$  における人 1 が時点  $t_2$  における人 2 と同定されるということは、人 1 と人 2 が同じ身体を持つということから説明が可能になる。対して、心理的基準では、人の同一性を心理的な継続性から説明する。この主張によれば、人の同一性は特定の直接的な心理的連結が強く重なり合った鎖があるという点から説明される。
2. Parfit(1984), p.210.
3. Baker (2012), p.180.
4. ロウは存在論的論証を行っているため、直観に訴える論証と経験論的論証に関しては本稿では取り上げない。非常に簡潔に説明を加えると、直観に訴える論証とは、複合説の持つ反直観的な諸問題（具体的には分裂の問題などが挙げられる）を指摘することによって、単純説の持つ直観的な力に訴える論証である。また、経験論的論証は、一人称パースペクティブという観点から問題を提起する。我々が身体的かつ心理的性質とそれらの関係について全てを知っているということは、人の同一性についての問題を残したままにしている。例えば、私が 17 世紀のフランスに生まれ異なる記憶や意図を持っていたという形而上学的可能性を考える時、それにもかかわらず、私の一人称パースペクティブから、その人生を生きているのは私であると考えることは可能である。このように、異なる可能世界の私を考える時、心理的性質や物理的性質、またそれらの継続がなくとも、一人称パースペクティブからは私という人の同一性は担保されうる。このように、経験論的論証は心理的關係や物理的關係が不在でも人の同一性はありうるという主張を行う。(Gasser,Stefan(2012), pp.15-16.)
5. Lowe (2012), p.147.

6. ロウは、このロックの one-level の同一性基準を改定して用いる人々を新ロック主義者と呼んでいる。ロックの同一性基準への反論として、有名なトマス・リードの「勇敢な士官」の例がある。この反論からロック的な基準を擁護するためのひとつの方法として、新ロック主義者たちはロックの基準的關係と論理的に推移關係にあることを保証する祖先 (ancestral) 關係を取り換えることを提案している。しかしながら、ロウは祖先關係が推移的關係である事実が、反射的で対称的であることを含意しないと、それが同値關係であることを保証しないと批判している。また、新ロック主義者は人が経験と記憶の祖先關係に立つことができないけれども、経験と準記憶 (quasi-memory) との關係に立ちうると述べることもある (Garvey(2011), p.215.)。だが、そもそも準記憶についての議論はそもそも意味をなすのかという疑いがかけられており、問題のある再反論であるとも考えられる。
7. Lowe (2012), p.150.
8. Ibid, p.151.
9. Lowe (2009), p.134.
10. Shoemaker (2012a), p.133.
11. ロックの訳出に関しては、1976 年の大槻春彦による訳を参照した。
12. Lowe (2010), p.444.
13. ロウはここで「私」という語を用いているが、ここでの「私」という語は、「人」という語と同じ意味で用いられている。
14. Ibid, p.446.
15. ここでロウは私が身体と魂の複合体であるという説を例として挙げている。これは、実体としてのそれらの複合体は個別的対象あるいは性質の担い手であるとしながらも、私はその身体と他の何か、すなわち私の魂を部分として含んでいるという主張である。実体二元論の提唱者であるデカルトはこの見解を支持しているように述べることはあるとロウは言うが、ロウ自身はこの立場を信じることはできないとして斥ける。

## 文献表

- BAKER, L. R, 2012, "PERSONAL IDENTITY: A NOT-SO-SIMPLE SIMPLE VIEW". IN GASSER, G, STEFAN, M(EDS.), 179-191.
- GASSER, G, STEFAN, M. 2012, "INTRODUCTION". IN GASSER, G, STEFAN, M(EDS.), 1-18.
- GARVEY, J, 2011, THE *CONTINUUM COMPANION TO PHILOSOPHY OF MIND*

- (*CONTINUUM COMPANIONS*). BLOOMSBURY USA ACADEMIC.
- GASSER, G, STEFAN, M(EDS.), 2012, *PERSONAL IDENTITY :COMPLEX OR SIMPLE?*. CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS.
- 加地大介 ,2008.「現代の実体主義の諸相——実体の独立性をめぐる」。『哲学の探究 39』, 37-49.
- KOONS, R.C, BEALER, G(EDS.), 2010, *THE WANING OF MATERIALISM*. OXFORD UNIVERSITY PRESS.
- ロック、大槻春彦（訳）.1976.『人間知性論』。東京、岩波書店
- LOWE, E.J, 1989, “WHAT IS A CRITERION OF IDENTITY?”. THE PHILOSOPHICAL QUARTERLY39, 1-21.
- LOWE, E.J, 2009, *MORE KINDS OF BEING: A FURTHER STUDY OF INDIVIDUATION, IDENTITY, AND THE LOGIC OF SORTAL TERMS*. WILEY BLACKWELL
- LOWE, E.J. 2010, “SUBSTANCE DUALISM: A NON-CARTESIAN APPROACH”. IN KOONS, R.C, BEALER, G(EDS.), 439-461.
- LOWE, E.J, 2012, “THE PROBABLE SIMPLICITY OF PERSONAL IDENTITY”. IN GASSER, G, STEFAN, M(EDS.), 137-155.
- PERFIT, D, 1986, *REASONS AND PERSONS*. OXFORD UNIV PRESS. (デレク・パーフィット、森村進（訳）.1998.『理由と人格 非人格性の倫理へ』。東京、勁草書房)
- SHOEMAKER, S, 2012A, “AGAINST SIMPLICITY”. IN GASSER, G, STEFAN, M(EDS.),123-136.
- SHOEMAKER, S, 2012B, “REPLY TO E.J.LOWE”. IN GASSER, G, STEFAN, M(EDS.),156.